

コラム 人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

「授業」こそが生徒指導の場

「生徒指導」と聞くと、かつては「放課後の指導」や「問題行動への対応」といった、授業の外側で行われるものというイメージが強かったかもしれませんが、学習指導を円滑に進めるための「前提条件」として、厳しく規律を守らせることが生徒指導だ、と考えられていた時代もありました。

しかし今、その関係性は大きく変わっています。新しくなった『生徒指導提要』では、すべての児童生徒の成長を促す「発達支持的生徒指導」の重要性が示されました。そして、その最大の実践舞台こそが、児童生徒が学校生活の大部分を過ごす「授業」なのです。

岡山県が推進する「授業5（ファイブ）」は、単に知識を効率よく詰め込むための型ではありません。例えば、児童生徒が自ら「やってみたい」と「めあて」を自分事にする瞬間、そこには「自己決定」という生徒指導の価値が宿っています。ペアやグループで考えを伝え合い、認め合う交流場面は、まさに「共感的な人間関係」を育む場そのものです。

授業を成立させるための規律（学びのかなめ）を校内で「そろえる」ことは、児童生徒が安心して失敗し、学べるための「安全・安心な風土」という土台になります。この土台があって初めて、授業の中に生徒指導が「内在化」し、児童生徒が主役となって動き出す「一歩先へ！」の学びが実現するのです。

「魅力ある授業をつくること自体が、最高の生徒指導になる」のです。「授業5（ファイブ）」のステップのひとつひとつが、児童生徒の「生きる力」を育てているのです。私たちも、皆さんの挑戦を全力で応援していきます。（高橋）



Vol.57

発行日 令和8年10月

岡山県教育庁 人権教育・生徒指導課

生徒指導 Leaflet @ OKAYAMA リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

生徒指導と学習指導の一体化③

～共感的人間関係の育成を促進する「話し合い」～

生徒指導と学習指導の一体化についてのイメージを深めるために、生徒指導の実践上の4つの視点をいかした取組の具体例の紹介の2回目です。
今回は主体的・対話的で深い学びを進める上で重要な「話し合い」について、「共感的人間関係の育成」の視点から読み解いてみましょう。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

〒700-8570
岡山県岡山市北区内山下2-4-6
Tel:086-226-7589 Fax:086-224-2134

Q.「話し合い」の価値を生徒指導の視点で考えるとどうなりますか？

A.「共感的な人間関係」を育むことは、他者の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる相互扶助的で共感的な人間関係を創りあげ、学級の失敗を恐れない安全な「風土」につながります。このあたたかい人間関係を児童生徒の間に育むためには、協働的な学びの場における「話し合い」が重要です。

今回は、「話し合い」の前提となる「自分で考え、表現する時間を確保する」（「授業5」の要素②）を中心に生徒指導との関係について解説します。

「共感的な人間関係」を育む話し合いのポイント

ポイント①：交流の前提としての「個」の確立

「まず、話し合ってみましょう」といきなり活動に入るのではなく、交流する前に一人ひとりが自分の考えをもてるよう支援することが不可欠です。

＜具体的な手立ての例＞

ワークシートや図表、具体物など、児童生徒が思考・表現するための思考の手がかりを準備します。

言葉だけでなく、数式や図、操作など、発達段階に応じた方法で自分なりの考えを表現させます。

ポイント②：交流場面における具体的なルールと配慮

単に話し合うこと自体を目的とするのではなく、身に付けさせた力を意図して活動を構成します。

＜具体的な手立ての例＞

「説明する際に、話し手や聞き手がどこに注目すべきか」という話し手・聞き手双方のポイントを具体的に示します。



『学習指導のスタンダード』のダウンロードはコチラ

交流の時間をあらかじめ決めておき、見通しをもたせます。

学級全体で交流する際は、児童生徒一人ひとりの考えを引き出し、つないで板書に位置付け、多様な考えの良さや本質を探らせます。

ポイント③：教師による「問い返し」と「価値付け」

児童生徒同士が互いの考えを認め合い、深め合えるよう、教師が意図的な働きかけを行います。

＜具体的な手立ての例＞

「～さんの考えの良いところわかりますか？」「～さんの考えはどうして浮かんだと思いますか？」といった問いを投げかけ、他者の視点への理解を促します。

児童生徒の発言を教師が価値付けながら、次の児童生徒の意見へとつなげていきます。

ポイント④：交流後の「自己変容」の保障

交流しただけで終わらず、自分の考えを再考したり、改善したりする時間を確保することが重要です。

＜具体的な手立ての例＞

「自分では思い付かなかった考え方」や「集団で練り上げたより良い考え方」を基にして、再度問題を解いたり表現したりする場を設定します。

振り返りの際、「全体交流をしたことで、～とも考えられることが分かった」といった他者との関わりによる自己の変容を自覚させます。

これらの工夫を通じて、授業の中に児童生徒一人一人の「出番（活躍できる場面）」と「居場所（過程を認められ、関わり合える場）」を意識的に作り出します。これにより、共感的な人間関係を基盤とした「学び合う学習集団」が形成されていきます。



『提要』のダウンロードはコチラ

「話し合う」ことの良さの実感が必要

POINT

すべての児童生徒が「話し合い」ができるよう「支える」